

海老名の農業のこと、どれくらい知っていますか

農業を中心に発展してきたまち、海老名。市内には、海老名耕地と呼ばれる水田地帯が広がっています。海老名耕地では、千数百年前から米作りが行われてきました。現在も使われている地名の小字、一大縄（いちおおなわ）などは、飛鳥・奈良時代に行われた条里制の名残りのひとつです。

現在、市内には696戸の農家があります。その中でも専業農家は109戸となっており、ほとんどが兼業農家や自給的農家です。専業農家の減少は、農地が狭いために農業用機械を十分に活用できない、後継者がいないなど、都市化の波を受けた、農業に従事するための環境変化などが主な原因と考えられています。

生活が便利になり、今後もまちの発展が続いていく中で、いにしえから続く営みを将来に向けて継承していくことも、私たちにとって大切なことではないでしょうか。

農地、特に水田には農業生産機能や雨水貯留、防災空き地としての防災機能のほか、ヒートアイランド現象の緩和や生物多様性の維持などの環境機能など、多面的な機能があります。この多面的機能は農業に従事している方だけのものではなく、市民共有の財産でもあります。

今号では海老名の農業の現状について、市や農家の方の取り組みなどを交えながら紹介します。

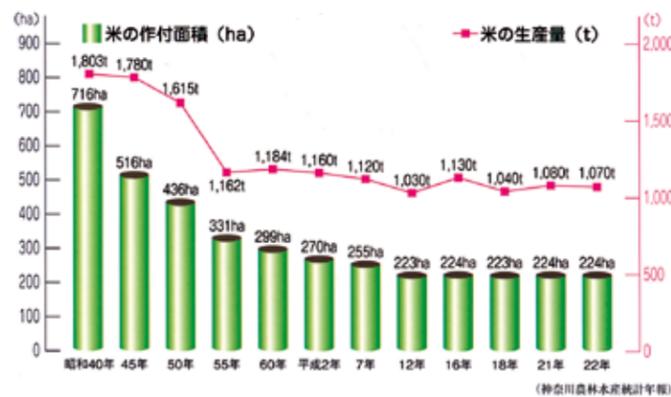
主な農産物

【米】

作付面積は224ヘクタール、収穫量は1070トンです（平成22年）。224ヘクタールは、尺貫法で換算すると2258反。一般的に、1反当たりおよそ8俵の米が収穫できると言われていますので、換算すると1万8064俵、

1俵がほぼ大人一人の1年分の消費量になるので、海老名ではおよそ1万8000人分の米が収穫されていることとなります。栽培品種は主に「さとじまん」と「キヌヒカリ」で、近年では稲が倒れにくく、実が大きくて味が良い県の推奨米「さとじまん」の割合が増えています。

また、市内小学校給食で提供されている米飯の半分は海老名産の米で、地産地消を推進しています。



稲穂が揺れる田園（下今泉で撮影）



市南部に広がる田園（上河内で撮影）



【野菜・果物】

温室での栽培を中心に、トマト・イチゴ・キュウリ・マスクメロンなどが作られています。海老名の温室は歴史が古く、1922（大正11）年に大谷地区にガラス温室が作られ、トマトとマスクメロンが栽培されたのが始まりです。露地栽培ではキャベツ・ジャガイモ・ナシなどを中心に栽培しています。「ふれあい農業」や「土の日」など、収穫体験も行われています。



【花】

主に温室でカトレア・カーネーション・バラ・スイートピー・胡蝶蘭などが栽培されています。温室で栽培されているため、季節を問わず四季の花を楽しむことができます。

【畜産】

海老名で飼育されている家畜は牛（乳用）とニワトリ（鶏卵用）のみ。かつては高座豚の産地としてたくさんブタが飼育されましたが、現在養豚農家はありません。まちの中で家畜を飼育する場、悪臭やふん尿処理の問題などがあり、継続が困難になっています。